

「道徳科」授業の特質

その特質を踏まえた授業づくりのために

後藤 忠

学校における道徳教育は二重構造をなしている。ひとつは、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育であり、もうひとつは道徳科で行う道徳教育である。

この二つは車の両輪のごとく連携し合っ
て確かな道徳性が養われていく。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育には偶発的、表面的、断片的、副次的といった特徴がある。したがって、道徳教育の要となる学習機会（道徳科）が必要になる。

1 「道徳科」学習、5つの特質

①道徳的諸価値について理解する学習

それぞれの価値は、(1)「人間として生きる上で大切なことだ」、(2)「しかし、なかなかそれを実現するのは難しい」、(3)「価値を実現したり、できなかったりした時の感じ方や考え方は皆一様ではない」ということ

を理解する学習である。

②自己を見つめる学習

道徳は自分自身の問題である。「自分はどうか」と自分に問い続ける営みである。

したがって、道徳科は道徳的価値に照らして自己を見つめ、自己理解を深めていく学習である。

③物事を多面的・多角的に考える学習

子供は他者と対話したり活動したりする中で、「物事を見る側面や見る角度によって見え方が違って見えてくる」ことを学ぶ学習である。それは価値理解と同時に、人間理解や他者理解を深めることに通じる。

こうした学習を通して、子供は道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方についての考えを深めていく。

④自己の生き方についての考えを深める学習

①～③の特質に共通して言えることは、

道徳科は自分はどう生きるかを問い続ける学習であるということである。今までやこれからの自分の生き方を考える学習である。

⑤「道徳性を育てる」のが目標

道徳性とは、道徳的「判断力」「心情」「実践意欲」「態度」のことである。これらは道徳的実践の原動力（発条）となる内面的な力のことである。

人間は心が充実すれば自ずから行動が変わる。その内面の充実を期して行われるのが道徳科の授業である。

2 「道徳科授業」成立、究極の4点

①よい教材を選ぶ！

教材は道徳科授業の命である。よい教材は子供の心を鮮明に映し出す。一方、よい教材は映りが悪い。そんな教材をいくらいじってもよい授業にならない。

よい教材とは、「ねらいに合っている」「分りやすい」「興味・関心をもてる」「臨場感がある」教材のことをいう。教師の心に響き、教師が惚れ込んだ教材は間違いなくよい教材といえる。

逆によくない教材には、その味わいがない。授業者の下心が見え見えで、「子供の今

に向かつて種(教材)を蒔いている」ように、実に胡散臭い。こういう教材は子供の心に何ら残らず、すぐに忘れ去られる。

道徳科で「種を蒔く」のは教師の仕事である。その種が芽を出し、花を咲かせるのは子供自身の問題である。蒔いた種は芽が出ないかもしれない、花は咲かないかもしれない。しかし、蒔かぬ種は生えないのである。だから種は蒔き続けなければならぬ。それが教師の仕事である。

せっかく蒔くなら、良質の種を蒔く、それが教師の誠意というものだと思う。

②教材提示に命を懸ける!

教師は何度も何度も範読の練習をして、迫真の教材提示に努める。教材提示は「間」が大切である。間の工夫を練習で会得する。教材提示は一回きりの真剣勝負である。その一回で子供の完璧な教材理解を目指すのである。授業中、くどくどとお話の事実確認をしなくて済むようにするためである。何回も練習したら低学年の短い教材などは暗記してしまうだろう。しかし、暗記するのが目的ではない。何度も練習すると教材の字面の奥にあるものが浮かんで見えてくる。それをつかむのが目的である。

③「本時のねらい」を鮮明に立てる!

道徳に限らず、「本時のねらい」は授業の出口である。授業終了時に子供がどこに立っているか、それを示すのがねらいである。したがって、ねらいが曖昧だと授業がぶれる。

ところで、道徳科のねらいは各教科のそれに比べて抽象的で曖昧なものが多いように思う。授業者に鮮明な出口のイメージがない授業ほど危なっかしい授業はない。濃霧の中をドライブしているようなものだ。

教材の扱いと関係づけてねらいを具体的に立てる、このことが肝心である。

④導入をしっかりと行う!

導入は子供が学習課題(学習の方向)をつかみ、学習意欲をもつ段階である。導入で子供の学習意欲に火がつくと後は放っておいてもどんどん学習が進む。だから、導入を疎かにしてはならない。それも価値への導入が基本である。(教材への導入は、一回の教材提示だけでは子供の完璧な資料理解が果たせないと判断した時だけに限る) 以上の4点が適えば、「道徳科」の8割は成立すると私は思っている。しかも、この4点は初任者でもできることである。

展開の前段での発問がどうの、展開の後段での自己の振り返りがどうのということにどうしても注意が向きがちであるが、それらは子供の側に立てば2割程度のことには過ぎないと私は思っている。(しかし、それを軽視するつもりは毛頭ない。発問や話し合い活動、自己を見つめる活動、板書構成の工夫などは非常に大事な課題であると思っている)

3 「道徳科」に臨む教師の身構え

道徳科授業は教師の人間性で行うものである。小手先のテクニクで行うものではない。

教師も人間としては発展途上中なのだから、週に一度「教師としての自分」から「人間としての自分」に戻る時間ととらえ、教材と子供と教師とが三つ巴になって自己を見つめ、自己のあり方や生き方について考え合う時間になりたい。

そのためには、ひたすら傾聴に努め、子供の思いを受容的に、共感的に、肯定的に、待つ、聴く、受け止めることに徹する。そして、**子供に学ぶ**という身構えを堅持することが大切である。